例会抄録

# 歴史学と文学の関連についての一考察

西巻　明彦

## 1. はじめに

歴史学と文学の関係は，古来よりさまざまな議論が行われている．ここでは，文学を歴史小説に限定して論考を進めていく．C. R. エルトンはこの命題を「閃き飽きた議論」（「The practice of History」，1967）と述べている．岩淵辰雄は「歴史の真相というものは，その時になかなかわからない．歴史は小説ではない．正確に分析せずただその空気なりジャーナリズムのもてはやすものだけによってきめてしまうと非常な間違いを犯す危険があることを知らねばならない．」（「昭和史の証言」，山口富永著，序文，1970）と記し，歴史の分析の重要性を述べている．海音寺潮五郎は「だいたい歴史上のいろんなことはね，文学で書かれなきゃだめなんですよ．歴史書に書かれただけではあまり影響力はないんです．…中略…すぐれた文学に書かれれば必ず有名になり，強い影響力を後世に持つようになるのです．」（「日本史探訪」，1971）と，歴史に対し大衆への影響力が文学の方が勝っていることを述べている．小林秀雄は「『平家』の作者は立派な歴史家であるが，彼の史観は「おごれる人も久からず，唯春の夜の夢の如し」の一と言で尽くせた．」（「歴史と文学」，1941）と心性の重要性を主張し，歴史学上の客観主義を批判している．今回，歴史学と文学の関連性の一端を歴史学の立場から考察した．

## 2. 歴史学と文学の関係性についての諸家の見解

日本に批判的歴史学を持ち込んだのはランケの弟子であるモースで帝国大学に在籍（1887～1902）し，史学会の成立（1889）にも大きな役割を果たしている．林健太郎は歴史学と歴史に対し，「歴史学においてはその学問の性格が第一に対象の客観的な叙述ということにあるとされているにも拘わらず，他方においてその対象そのものが最初から純粋に客観化されることが甚だ困難であるような性質を持っている．」（「史学概論」，1953）と歴史学と歴史にはっきりした区別の存在が薄いことを「特殊な性格」と主張している．

遅塚忠躬氏は「ソフトな科学」としての「歴史学」（「史学概論」，2010）を定義し，「読み手にとっては，歴史書によって思索することも，文学書によって感動することも，いずれも有益であることには変わりがない．ただ前書が「知」を磨くのをたすけ，後者が「情」を豊かにしてくれるという意味で，両者の効用が全く異にすることだけは確認してよいであろう．」（「史学概論」，2010）と歴史学と文学の違いを記している．さらに遅塚氏は「歴史学の作品は永遠に未完成の半製品であるのに対して，文学の作品は，すでに完成した完成品だ．」（「史学概論」，2010）と記し，歴史学は科学である以上その学説は書き換えられるけれども，文学作品は書き換えられず読み続けられるものであると指摘し，歴史学と文学を区別することを主張している．同時に，歴史学は史料を中心とした事実を探究する学問であり，文学は「事実と倫理の世界を超えた真実の世界に入る」（「史学概論」，2010）と芸術としての方向性を示している．

一方小林秀雄は「歴史と文学との一致」（「歴史と文学」，1941　但し新潮社 1968 には一致ではなく混合）と述べ，岡田英弘は「歴史は科学ではなく文学なのだ」（「歴史とは何か」，2001）と記述している．基本的には歴史学と文学を区別する概念と，芸術対科学という二分法を超えて，両者の垣根を取り払うことを主張する概念とに大きくわけて 2 つ存在する．

大岡昇平は歴史学と文学の関係について論究した作家であるが，南条範夫の論述（「史実と小

説」，朝日ジャーナルの10月20日号，1963）をもとに，1. 史実に即した客観的な小説，2. 一定の観念によって史実に価値判断を下すもの，3. 作者の持つ主題を表現するために，歴史を借りるもの，4. 歴史上不明とされている事件の，作者主観によるもの，5. 史料にとらわれず，作者の自由奔放な空想力を発揮するものとの分類を引用し，色々な立場があってよいという折衷的な立場に賛成しながらも，「史実に即したと称しながら，実際は作者の主観による改変を加えられているものなどは，非難を免れないだろう.」（「歴史小説とは何か」1963）と警告している．さらに「歴史小説には，歴史のそれ自体としての評価と，文学作品の芸術的価値の二つの軸があり」（「歴史小説とは何か」，1963）と述べている．大岡は「史料を扱う時，歴史家と歴史小説の作業に原則的にあまり差異がない…中略…歴史家では科学的な想像力であり，小説家では人間的な想像力である.」（歴史小説の問題，1974）とし，「小説は歴史と違って，原則として人間の快感充足の原理によって制作され消費される．小説家の職業上の秘密は，快感の体系を紙上に構築することであって，…中略…多数の読者を相手とする作家にはいわくいい難い技巧として，作家の内部に定着してている.」（「歴史小説の問題」，1974）と記し，作家の読者に対する快感充足の技巧を指摘している．

### 3. まとめ

歴史学と文学は，基本的にまったく異なる分野と考える．とはいえ，歴史＝文学と考える概念も存在し，いちがいに否定できないのは，林の指摘する歴史学のあいまいさにあると考える．歴史学者においても，歴史学の一般読者向けの普及書（例えば新書）があり，売るために大岡の指摘する文章の技巧と読者に対する快感充足も，重要な意味合いをもつと考える．しかし，岩淵の指摘する「その空気なりジャーナリズムのもてはやすものだけによってきめてしまうと非常な間違いを犯す危険がある.」という一節は，歴史家にとっては歴史分析が，表現の技巧より一段重要な位置をしめていると考える．さらに遅塚の指摘する点として，科学論文は反証できる必要性があるが小説は完成品のため反証できないとした事は，歴史学と文学の大きな相違点であると考えられる．

（令和3年1月例会）

# 辛くも戦禍を免れた種痘史料

松村　紀明

筆者による2021年3月例会発表「難波経直（立愿）と岡山県の対立からみた明治初期の種痘」の内容の多くは，「日本医史学雑誌」第67巻第1号掲載の拙論「明治種痘の研究―補完する種痘積善社と対立する種痘勧善社―」（以下，拙論）に依るものである．したがって，本稿は重複を避け，拙論内であまり言及できなかった紹介資料の来歴について紹介する．

本発表でも紹介した岡山県立図書館の所蔵史料「種痘ニ関スル醫師ト県官ノ問答」（以下，同問答）については，拙論の註において簡単な書誌情報を記載している．また，資料そのものは岡山県立図書館で閲覧は可能であり，また既に筆者が全文翻刻も行っている（青木歳幸『史料・西日本の種痘』収録）．しかしながら，種痘を含む明治初期の地域医療に関する他には見られない記述が多々あるなどの資料の希少性・重要性を鑑みると，ここで同問答の来歴について追加説明を行うことには意味があると考える．

同問答は巻頭に「吉岡三平氏所蔵（写）」との記載があり，状態から（鉄筆・カーボン複写か）明治初期当時のものとは考えにくく，原本の成立からかなり年数が経過してから作成された写しと推測するのが妥当である．手がかりとしては，巻頭